

ると頂いて見れば、御言葉は違へども御意は一致と知らるゝであらう。

## 第六席 御勸化ぶりの左右

唯不思議  
に思ふ  
に信ぜよ

一 祖師聖人も蓮如上人も共に御廻向の名號を以て安心の體を御知らせ下されたことは辯じ終つたが、夫に就いて其名號を信受したる相を御知らせ下さるゝに左右があつて一致に頂きかねるところがある、末燈鈔三十に「たゞ誓願を不思議と信じまた名號を不思議と一念信じとなへつるうへに何條わがはからひをいたすべき(乃至)たゞ不思議と信じつるうへはとかく御はからひあるべからず候」又四丁「たゞ不思議と信せさせたまひ候ぬるうへはわづらはしきはからひあるべからず候」又五丁「佛智不思議と信せさせたまひ候ひなば別にわづらはしくとかくの御はからひあるべからず候」、歎異鈔丁に「彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて」、又十二丁「誓願の不思議によりてたもちやすく

となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死をいづべしと信じて、念佛のまうさるゝも如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからはからひまじはらざるがゆゑに、本願に相應して實報土に往生するなり、これは誓願の不思議を信じたてまつれば名號の不思議も具足して誓願名號の不思議ひとつにしてさらなることなきなり」とあり、是等の御言葉を頂いて見ると助けたまへの念相なきに似たり、たゞ不思議と信ずるばかりで事足る様である、祖師の仰せに不足の有る筈なければ、不思議と信ずる中に助けたまへとたのむ道理は含んであるとして、正しき一念の相は決定不思議で御助けと信ずれば満足なるべしといふに、この義は種々の意得違ひの出来る處ゆゑ輒くは辯じ盡されぬことなれども、今試みに大略の所を述べて見れば。

二 抑祖師聖人と蓮如上人と御信心に相違のあらう筈はない、されば祖師聖人

宗祖が  
順ひ奉  
る方な  
る立ら  
押立仔  
る、細

の御信心もたのむ一念なることは申す迄もなきことなれども仔細ありて眞受にし  
て往生を佛智に任せ、うたがひなき決定の一念といふ相を手強く押立て、仰せら  
るゝのである、其仔細と申すは祖師聖人の御一代の御苦勞一宗開闢あらせらるゝ  
は何より起りたるぞと申せば、不了佛智の疑惑を誠めて明信佛智の信心を勧めた  
まふより外はない、不了佛智が明けても暮れても御忘れなされることのならぬ所  
對である、故に御草稿では疑惑和讃が悲歎述懐の中へ列ねてあり、教行信證とい  
ふ一段の名目を立て淨土眞宗を御開闢あらせられたのも、定散の自心に迷うて金  
剛の眞心に昏き人々を如實修行にならせ度といふ一つ、あらゆる御聖教御製作は  
申す迄もなく一通の御消息までが疑を誠めて信を勧めたまふより外はない。  
三 時に其不了佛智の念佛とは、所謂稱名憶念すれども無明猶ありて所願を満て  
ずとある不如實修行のことである、此不了佛智の念佛が一往表面から見ると疑ひ  
の臭ひもない様である、稱我名號の本願故に念佛だにも申せば往生すると落附て



如實修行  
不修

稱へて居るゆゑ、其人自身には疑ひはないつもりである、夫を祖師の御眼で御覽  
 あらせらるゝと疑惑不信の念佛となる、茲が誠に氣の附け處である、念佛さへ申  
 せば屹度淨土參りが出来るできと決定して稱へて居るは己がはからひである、吾が稱  
 ふる念佛の功徳を力ちからに思ふは定散自力のはからひである、このはからひの出るは  
 未だ佛智の不思議を信じないからだ往生ほどの一大事をひとすちに如來に任せた  
 てまつることが出来ないのは即ち佛智疑惑の人であると押へて、其不了佛智の疑  
 ひを誡めて明信佛智の行人にさせやうとあるが祖師聖人の思召である、そこで一  
 聲の稱名を待たずして信の一念に安心するのであると一念の處を押立て信心定ま  
 る時往生亦定まると信の一念に往生一定と決定して、其上で稱ふるが如實修行で  
 あると、初一念の決定心を手強く押立させらるゝ、是は元祖の御滅後定散の自心  
 に迷うて金剛の眞心に昏き族ら多き故、其不了佛智の念佛者を相手にして、何卒  
 元祖の正意にかなふ他力の念佛行者になされたく思召が御一代の御骨折故に是非

一の念のむ  
詳細し

箇様になければならぬ、不了佛智の疑惑を誠むるには勢ひ無疑の信心といふ處に力がはいる、是は理の當然である、是で祖師聖人の信ずるといふ處を押立てたまふ思召は頂かれたであらふ。

四 次に蓮如上人が助けたまへと彌陀をたのむ一念といふところ、特に御丁寧に御教へ下さるゝ譯は、矢張不了佛智の自力念佛を誠めて明信佛智の他力念佛行者になる様に教へ育てゝ下さるゝのである、こゝが誠に大事な處故に心を鎮めて味はれよ、本から出た末だから、蓮如上人の御文は祖師の本に心をすゑて伺ひ又本を傳へる爲の末だから御文から祖師の思召を知り、祖師と蓮師の一致なる趣きが頂かれて見ればいさゝかも偏執はならぬ、先づ祖師聖人の仰せらるゝ信心は即ち二種の深信である、故に末燈鈔七丁に「ふかく信じてとなふるがめでたきことに候なり(乃至)本願他力をふかく信せんともがらはなにごとにかは邊地の往生にて候べき」とあり、深く信じてとは善導の二種の深信である、これが元祖御

一代の御教化の骨髓で、選擇集の三心章の御私釋並に漢和語燈錄など處々の御釋を拜見すれば、能信の相は善導の二種深信を御相承である、其素意を繼承在らせらるゝ祖師故に深く信すると仰せらるゝは二種深信に違ひなし、其二種の深信は一深心を所信の事に隨へて開いて二種と建てたもの、合して見れば一深心である即ち合三爲一の信樂、信樂即ち歸命の一心である、之を元祖に心は助けたまへと思ふばかりと相承なされた、是れ即ち南無阿彌陀佛の由れ、阿彌陀佛われを助けたまへと申す名義に相應したる信相である、こゝの處を詳かに顯したまふが祖師聖人の御本書である、むづかしい學問沙汰を止めてひらたう申して見れば、無有出離之縁の我身が彌陀の誓願不思議に助けられて往生をとぐるなりと信じて見れば、心は助けたまへと思ふばかりである、此助けたまへの一念は決して信じた外のはからひではない、自力のはからひがすたりて、無手と彌陀一佛に歸する相である、念佛稱へて參られるといふはからひを捨て、誓願に助けられて見れば更



に餘の方へ心はふられぬ、そこが本願たのむ決定心である、そこが佛助けたまへど  
たのむ一念のおこり場である、此處の味を摘發しての御化導が蓮如上人の御文  
である、故に「かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まごひぬる我等ごときのこと  
らものをたすけんそちかひまします彌陀如來の本願にてましますぞとふかく信じ  
て一心にふたごゝろなく彌陀一佛の悲願にすがりてたすけましますとおもふこゝ  
ろの一念の信」と仰せられてある、實に此處の味ひさへ知れると、祖師聖人と蓮  
如上人の御言葉に左右あれども御意は一致であるといふ處が頂かれる。  
五 時に蓮如上人も不了佛智の念佛を御相手となされる、依つて御文に「世間に流  
布してみなひとのこゝろえたるをりは、なにの分別もなくくにたゞ稱名ばか  
りをとなへたらば極樂に往生すべきやうにおもへり、それはおほきにおぼつかな  
き次第なり」と押へてある、これが祖師の御化導を御手傳ひ在せられて不了佛智  
の念佛者を明信佛智の念佛行者になる様に教へたまふのである、然れば御相手は

祖師そしと同じくおな不了佛智ふりやぶつちの念佛ねんぶつである、然しかるに教をしへ方かたに左右さゆうあるはいかゞぞと申まをすに、こゝが實じつに巧妙こうめうなる處ところで、共ともに不了佛智ふりやぶつちの念佛者ねんぶつしやを目的もくてきになされながら押おさへ様が違ちがふ祖師そしの方ほうは前まへに申まをした通りとほ疑惑不信ぎよくふしんといふ處ところを押おさへて疑うたがひを誠いせめて信しんを勸すめたまふ、蓮師れんしは手てをかへて疑うたがひひといふ方ほうへは力ちからを入いれずに稱さなへさへすればまゐれると落附おちついて居ゐるゆる其稱そのさなへる念佛ねんぶつをたのみにして居ゐる處ところを押おさへて疑うたがひを誠いせめて信しんを勸すめたまふ、蓮師れんしは手てをかへて疑うたがひひといふ方ほうへは力ちからを入いれずに稱さなへさへすればまゐれると落附おちついて居ゐるゆる其稱そのさなへる念佛ねんぶつをたのみにして居ゐる處ところを押おさへて誠いせめたまふ、そこで御文おふみに自力念佛じりきねんぶつを出だしたまふに疑惑ぎよくゆるに惡わるいとは仰あふせられず、「たゞくちにだにも南無阿彌陀佛なむあみだぶつととなふればたすかるやうにみな人ひとのおもへり、それはおぼつかなきことなり」とのたまふ、是これが不了佛智ふりやぶつちの念佛ねんぶつのことなれども、世間せけんに沙汰さたする念佛ねんぶつは疑惑ぎよくゆる惡わるいとは仰あふせられず、たゞ稱さなへては助たすからざるなりと押おさへて「この念佛ねんぶつのいはれをよくしりたる人ひとこそほとけにはなるべけ



祖師も  
蓮師も  
方便で  
はない

れ」と、名號のいはれを知りて名義相應の如實修行になる様に教へたまふのである、そこで是非とも「この南無阿彌陀佛の六字のこゝろを詳しくしりたるがすなはち他力信心のすがたなり、南無とたのめば阿彌陀佛のたすけたまへる道理なり」と、六字の由れを説かねばならぬ、そこで言葉の約束が能歸の信相は助けたまへとたのむ一念なりと仰せられねばならぬことゝなる、對手は同じ不了佛智の人でありながら押へ方が違ふゆる祖師では信ずるといふ處を仰せられねばならず蓮師ではたのむところを仰せられねばならぬ、各思召の在すことである。

六 時に斯の如く申せば隨他意の方便なりやとの不審が立つかも知れぬが決して左様な軽いことではない、兩方ながら一念の信相なり、若し誓願不思議を信せざる助けたまへなれば他力廻向の歸命の一念ではない、夫は自力疑心の助けたまへである、又助けたまへとたのむ心のなき信じやうなれば是又名義相應の他力廻向の信心ではない、故に宿善開發の時至り本願名號の由れを聞開き、彌陀願力の不

思議しぎに助けたすられまゐらせて往生わうじやうをばとぐるなりと信しんじた處ところが、はや助けたすたまへの一ねん念ねんである、不思議ふしぎと信しんじたのと助けたすたまへとたのんだのと二ねん念ねんはないゆる偏あまることことは出来できぬ筈はず、然しかるに自慢じまんらしく此方このほう共どもは末すゑの御文おふみでは安心あんじんは定めぬ本もとの祖師そしの御聖教おしやうけうで安心あんじんを極きめて居ゐる、誓願せいがんの不思議ふしぎで腹はらがふくれたと申まをして内ない心しんで助けたすたまへとたのむなど、は凡夫ほんぶ自力じりきのはからひであると嫌きらふは却かへつて祖師そしの素意そいにはかなはぬ、又蓮師またれんしの御文おふみに偏へんして祖師そしの仰おほせを不足ふそくに思おもふは却かへつて蓮如上人れんによしやうじんの思召おぼめしを知らぬことゝなる、眞實しんじつ他力たうりきの信心しんじんなれば、助けたすたまへとたのむ歸命きみぎやうの一ねん念ねんに不思議しぎと信しんずる思おもひのぬける筈はずもなく、不思議ふしぎの願力がんりきに助けたすられ往生わうじやうを得うると信しんじた者ものが彌陀みだをたのむ一ねん念ねんのぬける筈はずもない、不思議ふしぎと信しんじた一ねん念ねんは助けたすたまへの思おもひより外ほかはない、かく聞き開ひらかれて見みれば祖師そし聖人しやうじんの御勸化ごくわんけにもうなづかれ蓮如上人れんによしやうじんの御勸化ごくわんけにもうなづかれるであらう。